

第3章

町のこころ

1. 鱈ヶ沢町郷土カルタ



きょうど
郷土カルタってどん
なカルタ？

あじが
郷土カルタは、鱈ヶ
沢町の5地区の特色
を学べるカルタだ
よ！



(1) 郷土カルタ

鱈ヶ沢町には、自然や文化、歴史など、町の特色をよんだ郷土カルタがあります。郷土カルタは、ふるさとに親しみ、ふるさとの良さを教えてくれます。

カルタは、読み札に書かれた短い歌（言葉）を聞いて絵札を取りあう、日本に古くから伝わる遊びです。カルタの中でも、地域のことがらをテーマにしたカルタを郷土カルタといいます。郷土カルタは、カルタを楽しみながら地域のことを学び、理解することができます。鱈ヶ沢町の郷土カルタは、1994（平成6）年につくられました。カルタの歌は全部で50種類あります。ほとんどが町の人々から寄せられた歌ですが、大正時代から昭和の初めころに活躍した町出身の歌人の歌も6種類あります。カルタは、町内の名所や歴史、景色、祭りなどをよんでいます。

地域の名所や文化、歴史などを楽しみながら学べる郷土カルタは「町の教科書」ともいえます。西海小学校では、町の文化や歴史を学ぶ「ふるさと学習」の教材として使われています。



鱈ヶ沢町郷土カルタ

鱈ヶ沢町郷土カルタ読本

鱈ヶ沢町郷土カルタのことを詳しく説明しているのが『鱈ヶ沢町郷土カルタ読本』だよ。この本では、カルタの歌がよまれた当時のころの町の様子や歌の意味などが紹介されているんだ。『鱈ヶ沢町郷土カルタ読本』は、日本海拠点館あじがさわの図書コーナーにあるから、読んでみてね。



(2) 地区の特色がよまれた歌

鱈ヶ沢町は、鱈ヶ沢地区、舞戸地区、赤石地区、中村地区、鳴沢地区の5つの地区に分かれています。郷土カルタでは、各地区の特徴的な景色や未来に残したい地域の宝もテーマにしています。

「円空が彫りし慈顔のみ仏を延寿院にわれはおろがむ」

この歌は、鱈ヶ沢地区の富根町にあるお寺「延寿院」の「円空仏」をおがんだ様子をよんだ歌です。円空仏は、円空というお坊さんがつくった仏像です。作者は、円空がつくったやさしい顔の仏像をおがんだ時の幸せに満ちた気持ちをよんでいます。延寿院の円空仏は、1662（寛文2）年に鱈ヶ沢沖であみにかかったものと伝えられています。青森県の文化財に指定されている、とても貴重なものです。

「樹齢三百有余年なる黒松の社頭に太し石神社」

この歌は、鳴沢地区の建石町にある「石神社」の木をよんだ歌です。石神社には、町の天然記念物に指定されている黒松があります。この歌では、樹齢300年以上という黒松の、太くりっぱな様子がよまれています。

このように、鱈ヶ沢町郷土カルタは、町の歴史や文化を知ることによって地区の特色を学ぶこともできます。

鱈ヶ沢町出身の歌人の歌

さくら 櫻井 夢村	うみ 海の上にたちこめし霧は きしべ 霧は岸辺より じょじょ 徐々にうすれて むらさき むらさきの波
おお 大沢 清三	にほんかいしお 日本海潮にけむりて磯浜に いそはま はる 春の雄風白波を寄す
じん 神 勝之助	いしと 石取りを競いて きぞ 塩からき水呑みき しお ふるさとの海は あみ 吾を育てき
かま 鎌田 純一	ふゆなみ 冬凧のおらぶ うみべ 海辺に早く はや 点く がいてう 街灯の彩 いろ うるみつらなる
みつや 三ツ谷 平治	せどやま 背戸山の椎の しい 茂みに呼び しげ 合える よあ 郭公の かっこう 声は遠く こえ なりつも
もり 森山 久五郎	にし 西の海に日の うみ 落ちむと ひ するひと お ときを つね み 見えざりし こしま 小島の かげ つ



郷土カルタの歌の意味を学びましょう

郷土カルタは、鱈ヶ沢町の歴史や文化、自然などをよんだカルタなんだよ。楽しみながら町の特色や良いところを学ぶことができるんだ。

郷土カルタの歌は全部で50種類あるんだ。歌には、大正時代から昭和にかけて活躍した町出身の歌人や、歌をよんだ町の人々の思いが詰まっているんだ。どんな意味なんだろう？ どんなことがよまれているんだろう？ 歌にこめられた気持ちや意味を知ると、郷土カルタがもっと楽しくなるよ。『鱈ヶ沢町郷土カルタ読本』で学んでみよう！

2. 北前船が運んだ人や文化



きたまえぶね あしがさわまち
北前船は、鯨ヶ沢町
にいろんな文化や人
を運んできたんだね。

むらかみや くじらもち めいじ
村上屋の鯨餅は明治
時代からつくられて
いたんだよ。



(1) 北前船が運んだ人や文化

北前船は、江戸時代中ごろから明治時代まで、大阪（江戸時代は大坂）から北海道までの間を行き来して商売をした船です。北前船は、さまざまな食べ物や日用品を運びました。また、商品のほかにも、人、技、おどりなど、さまざまな文化も運びました。漁師町の酒蔵「尾崎酒造」の先祖は、北前船で福井県から移り住んだ人の一人です。住み始めたころは海産物をあつかう商人でした。1860（万延元）年に、海産物の倉庫として使っていた蔵を利用して酒づくりを始めました。

北前船が運び、いまでも守りつがれている食文化もあります。一つは「鯨餅」、もう一つは「浪速煎餅」です。浪速煎餅は、江戸時代に大阪から移り住んだ商人が作り始めたお菓子です。北前船が運んだ当時は貴重だった砂糖を使ってつくられました。現在は本町にある「銘菓の店 山ざき」が製造・販売しています。

「正調鯨ヶ沢甚句」も、北前船で新潟地方から伝えられたとされる唄です。鯨ヶ沢町の無形民俗文化財に指定されています。

鯨ヶ沢町には、京都や大阪などの上方、瀬戸内海地方、日本海沿岸から北前船で運ばれたさまざまな文化が、いまでも息づいているのです。



銘菓の店 山ざきの「浪速煎餅」

【提供/銘菓の店 山ざき】



尾崎酒造の酒蔵

【提供/尾崎酒造】

(2) 鯨餅

北前船で鯨ヶ沢町に伝わった鯨餅は、いまでも、白八幡宮の近くにある「鯨餅本舗村上屋」でつくられています。

鯨餅は、うるち米、もち米、小豆、砂糖を混ぜてつくるお菓子です。昔は黒と白の2層のお菓子で、見た目が鯨に似ていることから、鯨餅と呼ばれたとされています。鯨餅が町に伝わったのは江戸時代のことです。当時、京都や大阪、中国地方などでつくられていたものが北前船で運ばれてきたのです。

村上屋が鯨餅をつくり始めたのは、明治時代の後期です。当時は鯨餅を売る店が5～6店ありましたが、いまでは村上屋だけとなりました。村上屋では、明治時代と同じつくり方で鯨餅をつくり続けています。また、日本海のあら波と岩木山がかかれた包み紙も、明治時代から変わらないデザイン。以前は、鯨ヶ沢町と同じように北前船が立ち寄った山形県酒田市で印刷していました。

鯨ヶ沢町には、明治時代から100年以上にわたって、変わらずに守りつがられてきた鯨餅があるのです。



村上屋の「鯨餅」

浅虫の久慈良餅

青森市浅虫にも「くじらもち」があるんだよ。浅虫では「久慈良餅」と書くんた。浅虫の「永井久慈良餅店」を始めた人は、鯨ヶ沢町の出身なんだ。鯨ヶ沢で習い覚えた鯨餅を浅虫で作り始めたんだよ。1907（明治40）年のことだよ。北前船で鯨ヶ沢に伝わった鯨餅が、浅虫にも伝わったんだね。



【提供/永井久慈良餅店】



北前船が立ち寄った港のお餅を調べてみましょう

北前船は、各地の商品だけでなく、いろんな文化や人も鯨ヶ沢町に運んできたんだ。尾崎酒造のご先祖は、福井県から移り住んだ人だったんだね。浪速煎餅をつくり始めた人も大阪から移り住んだ人だったんだ。浪速煎餅は、そのころ、とても貴重だった砂糖を使った、ぜいたくなお菓子だったんだよ。鯨餅も北前船が町に伝えたものだよ。村上屋の鯨餅は、100年以上、同じつくり方が受けつがれているんだね。

山形県の「くじら餅」、北海道函館の「べこ餅」など、北前船が立ち寄った港には、呼び方や形は違うけれど、鯨餅によく似たお餅があるんだって。調べてみよう！



3. 白八幡宮大祭



しらほちまんぐうたいさい
白八幡宮大祭って、
どんなお祭りなんだ
ろう？

古くからの決まりご
とを守って行われて
いるお祭りなんだよ。



(1) 白八幡宮大祭の歴史

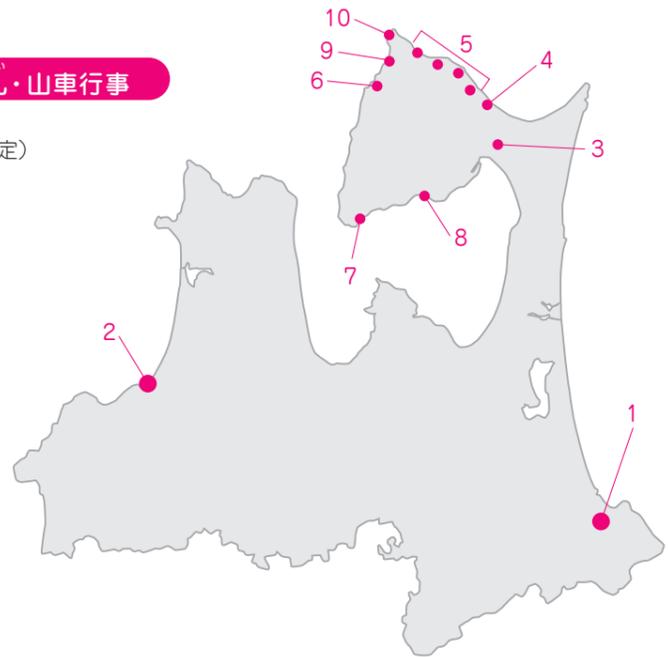
鱈ヶ沢地区の本町にある白八幡宮では、4年に一度、大祭が行われます。白八幡宮大祭は、北前船によって運ばれた上方の文化を受けついでいる祭りとしてされています。京都のお祭りによく似ていることから「津軽の京まつり」とも呼ばれています。

白八幡宮大祭は、津軽の平和や豊作などを願って、神様をのせた御神輿が町内をめぐってお祭りです。1677（延宝5）年に始まりました。はじめは2年に一度行っていたが、大正時代からは4年に一度になりました。現在も4年に一度、8月14～16日に行われます。大祭では、御神輿の行列に、鱈ヶ沢地区の各町内の山車がお供します。昔は、弘前八幡宮などでもこうした祭りが行われていました。しかし、いま津軽地方で行われているのは、鱈ヶ沢町だけとなりました。

江戸時代から続く白八幡宮大祭は、1981（昭和56）年に町の無形民俗文化財になりました。また、2015（平成25）年には、青森県の無形民俗文化財に指定されました。

国・青森県の無形文化財指定の祭礼・山車行事

1. 八戸三社大祭の山車行事（八戸市・国指定）
2. 鱈ヶ沢白八幡宮の大祭行事
3. 田名部の山車行事（むつ市）
4. 大畑の山車行事（むつ市）
5. 風間浦の山車行事（下北郡風間浦村）
6. 佐井の山車行事（下北郡佐井村）
7. 脇野沢の山車行事（むつ市）
8. 川内の山車行事（むつ市）
9. 奥戸の山車行事（下北郡大間町奥戸）
10. 大間の山車行事（下北郡大間町大間）



【青森県より】

(2) 御神輿

白八幡宮大祭では、白八幡宮と白鳥大明神の御神体が移された2基の御神輿が町内をめぐります。御神輿がめぐることを「渡御」といいます。神輿渡御は、白八幡宮を中心に町内を上と下に分け、2日間にわたって行われます。神輿渡御では、御神輿を中心に、200人以上の人々が行列を組んでお供します。この時、御神輿をかつぐ人、神様の宝物や道具をもつ人は、白い布で口をかくす「口覆い」を行うしきたりがあります。これは、神様にけがれが移らないようにするためです。御神輿は、道順や神様がお休みになる場所などが決められています。一日目の夜、「御旅所（御仮殿）」という場所に着くと、御神輿にのってきた神様はここでお休みになります。御旅所では、神様が無事に着いたことを知らせる「着輿祭」や宵宮が行われます。二日目は、神輿渡御はなく山車の自由運行が行われます。三日目には、御座船という船に御神輿をのせる「海上渡御」が行われます。大漁と海の安全を願って行われる海上渡御は、港町ならではの祭です。そして御神輿は決められた道すじを通り、白八幡宮へと帰ります。

白八幡宮大祭は、古いしきたりや決まりを守り、今日まで受けつがれてきたのです。



2基の御神輿

着座拝礼

御神輿が通る道すじの家々には「着座拝礼」という古い作法が受けつがれているよ。家の前にゴザを置いて机を置き、お神酒などをお供え。御神輿が通る時は頭を下げてむかえるんだ。昔は、家の2階から御神輿を見下ろすのも禁止されていたんだって。



大祭の歴史やしきたりを調べてみましょう

白八幡宮大祭は1677（延宝5）年から行われていたんだ。300年以上の歴史があるなんて、びっくりだね。大祭では、2基の御神輿に町内の山車がお供するんだ。こうしたお祭りが続いているのは、津軽地方では鱈ヶ沢町だけなんだよ。鱈ヶ沢町の人たちは、古くからのしきたりや決まりごとを守って白八幡宮大祭を続けてきたんだね。「白八幡宮大祭」のホームページでは、大祭の歴史やしきたりを、もっと詳しく説明しているよ。図録もダウンロードできるから、見てみよう！



4. 白八幡宮大祭の山車と伝統芸能



あしがさわ
鱈ヶ沢地区の10の
町内に1台ずつ山車
があるんだって。

えどじだい
江戸時代から受けつ
がれてきた、おどり
や神楽も行われるよ。



(1) 御神輿にお供する山車

白八幡宮大祭では、御神輿の行列に、大きな人形をのせた山車がお供します。山車は、鱈ヶ沢地区の10の町内にあります。

鱈ヶ沢の山車は、天保年間(1830~1844年)ころからあったとされています。もともとは「飾り山車」といって、町内にかざっておくものでした。現在のように引いて運行する「曳き山車」になったのは明治時代のころから。大正時代ころには、ほとんどの町内が曳き山車に変わっていきました。最近では山車を「ダシ」と呼ぶことが多くなりましたが、鱈ヶ沢町では古くから「ヤマ」と呼びます。

山車は、鱈ヶ沢地区の10の町内に1台ずつあります。各町内の台車の上には、武者や神話などをテーマにした人形がかざられています。そして、裏側には「見送り」があります。町内によって、江戸時代につくられた古い人形をかざる町内や、時代にあわせて工夫した新しい人形をかざる町内もあります。台車の下には囃子方が乗ります。囃子方は、かね、太鼓、笛、三味線でお囃子を奏でます。このお囃子は祇園囃子といい、それぞれの町内で受けつがれてきたものです。ゆったりとしたお囃子の音色が、祭りの雰囲気をつくりだします。



町内をねり歩く山車の様子

町で一番古い山車人形

釣町の人形「恵比寿(事代主命)」の箱には、1846(弘化3)年と書かれているんだ。年代がわかるものでは、町で一番古い山車人形だと考えられているよ。恵比寿様は漁業と商売の神様なんだよ。



(2) 受けつがれる伝統芸能

白八幡宮大祭では、各町内に受けつがれてきた伝統芸能が披露されます。

チャンチャレンコと夜神楽は、山車運行の途中に山車を止めて披露されるおどりで、町内ごとにおそろいの衣装を着た子どもたちが、お囃子にあわせておどります。チャンチャレンコは行き道のおどりで、いまは複数の男の子たちがおどっていますが、昔はおとなを交え、1~2人でおどっていました。一方、夜神楽は、帰り道に女の子がおどります。夜神楽は、戦後にできたおどりといわれています。各町内で受けつがれてきたチャンチャレンコや夜神楽は、町内ごとに特徴があります。

新町は、山車のかわりに「カシ禰宜」という神楽を奉納しています。カシ禰宜は、子どもだけで行われる神楽です。江戸時代、塩を売買する場所だった新町には、塩の守り神である塩釜明神という神様をまつっていたといわれます。カシ禰宜は、1780(安永9)年に新町の名主が宮城県塩釜神社の神楽を習い、伝えたといわれます。大祭中の3日間、御神輿が通る道につくる「御仮殿」で奉納されます。

白八幡宮大祭で行われる芸能も、長く続く歴史の中で受けつがれてきたものなのです。



チャンチャレンコの様子



新町のカシ禰宜の様子



白八幡宮大祭に参加してみよう

白八幡宮大祭の伝統は、江戸時代から300年以上もの間にわたって各町内に受けつがれているんだ。一番古い山車人形は江戸時代につくられたなんて、びっくりだね！ 大祭では、どんな山車が出ているんだろう？ 各町内の山車の名前や、どんな場面を表現している人形なのか、「白八幡宮大祭」のホームページで見ることができるよ。

白八幡宮大祭で行われている、おどりや神楽にも長い歴史があるんだね。4年に一度行われる白八幡宮大祭に参加しようね！



5. 目内崎獅子舞と正調鱒ヶ沢甚句



目内崎獅子舞は地区の人から人へ、古くから伝えられてきたんだね。

正調鱒ヶ沢甚句の唄を聞いたことあるかな？



(1) 目内崎獅子舞の始まり

赤石地区にある目内崎集落に伝わる獅子舞が目内崎獅子舞です。目内崎獅子舞は、大浦光信の時代までさかのぼるといわれるほど長い歴史をもっています。

獅子舞は、種里にやって来た大浦光信が種里城を築く際に領内の平和と豊作をいのって、都からまねいた役行者が村人に教えたのが始まりとされています。

目内崎獅子舞には、長い間、お囃子やおどりを記したものではありませんでした。目内崎では、集落の人々が人から人へ、獅子舞を守り伝えてきたのです。昔は、お正月やお盆になると神社に獅子舞を奉納していました。また、お祝いごとなどでもおどっていました。しかし、昭和30年代に入ると、獅子舞を受けつぐ人が少なくなります。やがて、獅子舞を知る人もわずかになってしまいました。失われかけていた目内崎獅子舞ですが、1990（平成2）年の「津軽藩始祖光信公入部500年祭」をきっかけに保存会を結成。1991（平成3）年には、町の無形民俗文化財に指定されました。

目内崎獅子舞は、500年以上もの歴史があるともいわれる獅子舞です。目内崎集落の人々によって、現在まで大切に守り伝えられてきたのです。



獅子舞を奉納する目内崎獅子舞保存会

【提供/目内崎獅子舞保存会】



獅子頭

(2) 正調鱒ヶ沢甚句

鱒ヶ沢町には、北前船の船乗りによって秋田や北陸地方から伝えられたとされる盆踊りがあります。正調鱒ヶ沢甚句です。

この唄は、「甚句」や「イヤサカ」と呼ばれ、かつては盆踊りの前に歌い踊られていました。しかし、やがて歌える人が少なくなっていました。そこで、この甚句を伝え残そうと、1963（昭和38）年ごろ、公民館の館長をしていた大沢清三らの呼びかけで保存会が作られました。保存会では、当時、甚句を歌い伝えていた、富根町に住む86歳の小山内しなの協力で唄と踊りを保存。1984（昭和59）年、正調鱒ヶ沢甚句は、盆踊り唄「鱒ヶ沢くどき」とともに、町の無形文化財に指定されました。

一方、鱒ヶ沢高等学校の流し踊りで使われているのは、新民謡「鱒ヶ沢甚句」です。この鱒ヶ沢甚句は、戦後、津軽民謡の基礎を作った成田雲竹と高橋竹山が正調鱒ヶ沢甚句と鱒ヶ沢くどきを元に編曲したものです。

正調鱒ヶ沢甚句は、鱒ヶ沢くどきとともに、津軽地方の甚句やよされの元となったとされる唄です。また、北海道の民謡にもえいきょうを与えたとされています。

正 調 鱒 ヶ 沢 甚 句

一、 オレの裏庭の唐辛子の花コ
ハ― イヤサガサツサ
白く咲いてもノ―赤くなる
ソレヤ赤くなる
咲いてもノ―赤くなる
ハ― イヤサガサツサ

二、 お前や一人か連衆はないか
ハ― イヤサガサツサ
連衆後からノ―駕籠で来る
ソレヤ駕籠で来る
後からノ―駕籠で来る
ハ― イヤサガサツサ

三、 姉と妹に紫着せて
ハ― イヤサガサツサ
どちが姉やらノ―妹やら
ソレヤ妹やら姉やらノ―妹やら
ハ― イヤサガサツサ

※正調鱒ヶ沢甚句は六番まであります



獅子舞と正調鱒ヶ沢甚句を見聞きしてみよう

目内崎獅子舞と正調鱒ヶ沢甚句は、どちらも町の無形民俗文化財なんだ。

目内崎獅子舞は、500年以上にわたって守り伝えられてきたといわれるんだ。けれど、地区の人だけで受けついでいくのが難しくなっていて、集落をこえて、獅子舞をおどってみたい人を集めているんだって。農作業が終わる冬に練習しているから、見学してみようね。

正調鱒ヶ沢甚句を聞いたことあるかな？ 鱒ヶ沢町のホームページで唄を聞くことができるから、聞いてみようね。



【正調鱒ヶ沢甚句】

6. 鱒ヶ沢町に伝わるむかしこ



あしがさわ
鱒ヶ沢の「むかしこ」
を、いくつ知ってる
かな？

鱒ヶ沢に伝わる6つ
の「むかしこ」を取
り上げたDVDがあ
るんだって。



(1) 語りつがれるむかしこ

古くから語りつがれてきた昔話や伝説などを「むかしこ」といいます。豊かな自然にめぐまれた鱒ヶ沢町にも、それぞれの地域の歴史や特色などを伝えるむかしこがあります。

テレビやラジオなどがなかった時代、むかしこを聞くことは子どもたちの楽しみでした。むかしこでは、昔話や地域の歴史を伝える伝説などが語られます。その中には、危険な目にあわないための教えなど、生きていくための知恵もこめられています。子どもたちは、むかしこからさまざまなことを学びました。そしておとなになったら、聞き覚えたむかしこを子どもたちに聞かせます。こうして、むかしこは現在まで伝わってきました。

鱒ヶ沢町に伝わるむかしこを未来に残すため、町の教育委員会は、6つのむかしこを収録したDVDをつくりました。お話は、すべて津軽弁で語られています。DVDができたことで、これまで言葉によって人から人へ伝えられてきたむかしこが、映像でも楽しめるようになりました。

むかしこは、子どもたちの楽しみであり、さまざまなことを教えてくれるお話です。鱒ヶ沢町にも、語り伝えられてきた昔話や伝説などのむかしこがあるのです。

(2) 「さんこきつね」と「鬼神太夫」

鱒ヶ沢町に伝わるむかしこに「さんこきつね」と「鬼神太夫」というお話があります。この2つのお話は、DVDにも収録されています。

さんこきつねは、人間に化けて人をだますきつねと伝次郎という人が「宝生の玉」を取りあうお話です。このむかしこには、七ツ石町の高沢寺や、舞戸地区・鱒ヶ沢地区を中心とした地名や人物が登場します。だまし、だまされ、きつねと伝次郎の知恵くらべ。最後に宝生の玉を手にするのはどちらでしょうか？

一方、鬼神太夫は、鳴沢地区の伝説にまつわるむかしこです。鬼神太夫は、十腰内、浮田、湯舟などの地名の由来になったといわれるむかしこです。昔、小屋敷町にうでの良い刀鍛冶がいました。ある日、刀鍛冶のもとに娘と結婚したいという若者がやってきます。刀鍛冶は、結婚の条件として10本の刀をつくるように若者に命じます。若者は「決して仕事場をのぞかないでくれ」といって仕事場にこもり、刀をつくり始めます。刀鍛冶がそっとのぞいた時に見た若者の正体は…。

さんこきつねと鬼神太夫は、どちらも古くから鱒ヶ沢町に伝わってきたむかしこです。鱒ヶ沢のむかしこには、町の地名やお寺、神社などが登場するお話があるのです。



さんこきつね



鬼神太夫



むかしこのDVDを見てみましょう

昔から語りつがれてきた昔話や伝説を「むかしこ」というんだね。テレビなどがなかった時代の子どもたちは、おとなから、むかしこを聞くのが楽しみだったんだよ。子どもたちは、むかしこをワクワクして聞きながら、生活の知恵や地域の歴史などを学んでいたんだね。



鱒ヶ沢町にも、地域の歴史や特色を伝えるむかしこがたくさんあるよ。語りつがれるむかしこを、映像で楽しめるDVDがあるんだ。「さんこきつね」「鬼神太夫」を含め、全部で6つのお話を収録しているよ。中央公民館で販売してるから、見てみようね。



町で作ったDVD

DVDに収録されているむかしこ

- ・さんこきつね
- ・もうじゃぶね
- ・亡者船
- ・おたからガメ
- ・みつぶこういちだい
- ・光信公一代記
- ・光信公の鬼退治
- ・きじんだゆう
- ・鬼神太夫